

教会の健全な成長と発展を支える「福音主義神学」となるために

～歴史神学の立場からの一応答～

(日本福音主義神学会西部部会秋季研究会議応答講演要旨)

2013年11月18日

於 関西聖書学院

担当 青木保憲

(京都中央チャペル/同志社大学嘱託講師)

市川氏の要旨を拝見させて頂いた。その要旨は、日本福音主義神学会（JETS）の骨子とその背景（規約第三条、四条）に解説が加えられていた。要旨を読むことで、本学会の方向性が私にとって明確になったと言える。まずこのことに感謝申し上げたい。私は一昨年から本学会に加えて頂いた新参者である。今回、市川氏の発表要旨を通して、私が学会員として受け入れられたことの意義を改めて思い知る機会となったのである。

ご存じの方もおられると思うが、私の神学的背景はかなり特殊である。ペンテコステ教会に生まれ育ち、専門的な神学（博士）は同志社大学院神学部で修めている。専攻はアメリカ福音派研究である。これを歴史神学の手法で行っている。この背景から本学会で発信することを認めて下さった諸先輩方に心から御礼申し上げたい。とはいえ、私の信仰およびキリスト教理解はどこまで行っても「福音主義」であることは明白である。そう言った意味で、私の応答講演は、市川氏の講演要旨へのレスポンスというスタイルを採るが、その目指す方向性は、JETSの枠組みをより明確にするものであることをここに明記しておく。規約第四条にある「教会の健全な成長と発展に奉仕」する、このための一助となれば存外の幸せである。

市川氏の言葉で「福音主義は上記諸派・諸傾向に対峙しなければならないが、もしそれらに真理契機（一面の真理性）があれば、それらに反動的になることなく—反動は同じ原理の焼き直しに過ぎない—、その契機を批判的に昇華し、福音主義の立場からそれを生かし直す—一旦十字架につけ、復活させる—ことが必要」とある。これは正鵠を射た表現であると確信する。なぜなら市川氏も後述しているように「原理的、究極的には、人間学問（human science）は人間生活（human life）のため」だからである。人が生きていく中で遭遇する様々な出来事に適切に対処することにこそ、学問はその存在意義を与えられるという主張に私は首肯するものである。

さて、その観点から市川氏の要旨を拝見するに、いささか「反動的」な表現や歴史的に不適切な言い回しに出くわすこととなった。これは氏個人の見解と言うよりも、むしろ「福音主義神学（者）」を自任する私たちがしばしば陥りがちな傾向ではないかと思われる。今回はそれを2つの観点から述べさせて頂くこととする。

応答① 「対立項（反福音的立場）」という表現から見えてくるもの

P1 中段で市川氏は、人間中心主義（律法主義、合理主義、経験主義、敬虔主義、神秘

主義…)を福音主義の「対立項(反福音的立場)」として挙げている。しかしこれは歴史的に見て正しいとは言えない。科学技術の発展による世界の変化に「対抗する者たち」が保守化し、新たな変化を生み出しつつある世界に「順応しなければ生きられなかった者たち」を「人間中心主義」「反福音的」として断罪した、という歴史的側面を見落としているからである。

特にこの傾向は、19世紀末アメリカにおいて明白に見てとれる。産業革命の影響を受けて科学技術の発展を経験した人々は、従来のような緩やかな「キリスト教世界」ではもはや生きられないことを悟り始める。都市化、新移民流入による貧富の差の拡大は、人々に従来のような世界観(自分たちは聖書を基盤として生きているから大丈夫、とする意識)では生きてゆけないというメッセージを伝えることとなった。だから彼らの一部は、聖書の権威をなるべく失墜させることなく、同時に現実の世界で生き抜く方法を模索し始めたのである。しかしこういった「順応」に抗い、現状に反旗を翻すかのごとく従来の価値観をことさら強調し、時には新たな原理原則すら聖書から抽出する人々が生まれてきた。彼らこそ現在の「福音主義」のルーツとなる人々である。ⁱ

ここで「人間学問は人間生活のため」という言葉を思い出して頂きたい。この観点からすれば、「人々が世に対しても神に対してもよりよい生活を送るために神学は存在する」ということになるはずである。このような葛藤の時代を歴史神学の視点から顧みるなら、結果的に「歴史的産物としての二項対立図式(福音的立場・反福音的立場)が生まれてきた」と言わざるを得ないのではないだろうか。ⁱⁱ

応答② 聖書の無誤性・無謬性をめぐる歴史的展開

聖書の無誤性(inerrancy)、無謬性(infallibility)という区分けについても、二項の連関を理論的にのみ捉えていては、机上の空論となってしまふ。1940年代後半、このような区分けをし、違いを際立たせてでも人間の実生活における聖書の権威を守ろうとした神学者たちが存在した、という歴史的事実にこそスポットを当てるべきである。ⁱⁱⁱ

ご存じのように、1947年にフラー神学校が開校した。この意味は現在福音主義を標榜する者たちにとって、大きな意味を持っている。彼らは当時人々がキリスト教保守派に対して抱いていた「無知で無学、そして社会的事柄に無関心な人々」というイメージを払拭しようとしたのである。一般大学で博士号の学位を持つ者や、社会問題に関心を持つ牧師たちが集まり、南北戦争前に人々が抱いていたような「福音主義」をもう一度戦後アメリカに復活させようとして、自らを「新福音主義」と称したのである。彼らの運動は有る一定の賛同を得、人々の耳目を集めるほどになっていった。

しかし1962年に決定的な亀裂が生まれてしまった。それは新福音主義内で、「聖書の取り扱いについて高等批評の成果を受け入れるかどうか」をめぐって最終的な結論が出なかったことである。高等批評の受け入れは、聖書の権威を失墜させるものであると主張した新福音主義の第一世代は、そのほとんどがフラーの教壇から去ることとなった。そして彼らにとっては第二世代にあたる後継者たちが、神学校教育にリベラリズムの知識を取り入れ始めた。しかしその姿勢は部外者から見るなら、違和感、齟齬感をぬぐい去ることはできなかったのである。

亀裂が決定的になったとはいえ、両者が共に願っていた事柄は、何とかして聖書の権威

を守りたい（または、聖書の権威性を明らかにし、人々に浸透させたい）という思いであった。この願いを受け止めてこそ、無誤性 (inerrancy) 、無謬性 (infallibility) という区分けについて熱く議論することに意味が見出されるのではないだろうか。

まとめ

アプリアリに神聖不可侵な「福音主義」が存在した、という立場から機能的に探究することは、神学の骨格を強めるという意味では意義深いことである。しかし、さらなる追究と規約四条にある「教会の健全な成長と発展に奉仕することを目的」とした学会として発展していくことを目指すならば、また、真に「人間生活のための人間学問」となることを「福音主義」が目指すならば、神学用語を駆使し、聖書の中身を文献で探るという世界を突き詰めると同時に、（キリスト者でない者たちも含めた）この世で生きる人々の動向を加味した形での多角的な学的探究が求められているのではないだろうか。そういった意味で、歴史神学的手法に則った、いわゆる「下からの探究」が現在の「福音主義」の精査には求められていると確信するものである。

また、追記ながら語らせて頂くなら、教会の健全な成長は、やはり健全で有効的な福音宣教の働きなくしては起こり得ないであろう。つまり、宣教される側＝キリスト者でない者たちの世界観や価値観を知り、そこで語られている「キリスト教」という枠組みを理解することで、キリスト者と未信者との価値観に架橋することが可能となるはずである。昨今、キリスト教関連の書物が売れている。^{iv} それらはやはりリベラリズムに則った大学教授や著名人の著書である。日本でキリスト教に触れる機会とは、直接に教会に行くか友人から誘われでもしない限り、このような著書を通してであろう。これらを断罪し、耳をふさぐことは簡単である。また、反論書を出版することもできるであろう。^v だが私たちが教会の健全な成長と発展のために行うべきことは、このような異なる教えや見解がなぜ生まれ、そしてどのような経過をたどって現在に至っているかを説明することではないだろうか。

歴史には善人も悪人もない、と言われる。そこにあるのは、限られた状況で精いっぱい生きる人間の姿である。もちろん神を求める信仰姿勢もそこには含まれるであろう。この姿勢を学的研究に適応していくことができるなら、「福音主義」の探究は人々にとって最もリアリティを伴う「救済」への道となると思われるのだが、いかがであろうか。

ⁱ 彼らは20世紀初頭に自信と誇りを持って「根本主義者 (fundamentalist)」と名付けられ、それを自身も好意的に受け止めていた。

ⁱⁱ P2 上段にある「“破壊的”聖書批評学」という表現にも、同様の歴史認識の欠落を見えてしまう。高等批評を探究した者たちは、むしろ敬虔なキリスト者であり、決して従来の価値観やその源泉となっている聖書を「破壊しよう」としたわけではない。

ⁱⁱⁱ 拙書『アメリカ福音派の歴史』（明石書店 2012）第三章「新福音主義の時代」に登場する第一世代と第二世代との対立は、まさにこのスリリングな展開を描写している。

^{iv} 例えば橋爪大三郎、大澤真幸『ふしぎなキリスト教』（講談社現代新書 2011）。長谷川修一『聖書考古学 史跡が語る史実』（中公新書 2013）。佐藤優、中村うさぎ『聖書を読む』（文藝春秋 2013）。特に『ふしぎなキリスト教』は、発刊から2年経ってもなお Amazon ランキング 4000 位（新書ランキング 34 位）（Amazon）である。

^v カトリック司祭の来住英俊は『「ふしぎなキリスト教」と対話する』（春秋社 2013）を発刊し、対話路線を打ち出している。しかし Amazon ランキングでは 16 万位以下である。